

『世新人の「資本論」』(齊藤幸平: 集英社新書)

はじめに——SDGsは「大衆のアヘン」である！

温暖化対策として、あなたは、なにかしているだろうか。レジ袋削減のために、エコバッグを買った？ ペットボトル入り飲料を買わないようにマイボトルを持ち歩いている？ 車をハイブリッドカーにした？

はつきり言おう。その善意だけなら無意味に終わる。それどころか、その善意は有害でさえある。

なぜだろうか。温暖化対策をしていると思いついて、真に必要とされているもつと大胆なアクションを起こさなくなってしまうからだ。良心の呵責かしゃくから逃れ、現実の危機から目を背けることを許す「免罪符」として機能する消費行動は、資本の側が環境配慮を装って私たちを欺くグリーン・ウォッシュにいと簡単に取り込まれてしまう。

では、国連が掲げ、各国政府も大企業も推進する「SDGs (持続可能な開発目標)」な

ら地球全体の環境を変えていくことができるだろうか。いや、それもやはりうまくいかない。政府や企業がSDGsの行動指針をいくつかなぞったところで、気候変動は止められないのだ。SDGsはアリバイ作りのようなものであり、目下の危機から目を背けさせる効果しかない。

かつて、マルクスは、資本主義の辛い現実が引き起こす苦悩を和らげる「宗教」を「大衆のアヘン」だと批判した。SDGsはまさに現代版「大衆のアヘン」である。

アヘンに逃げ込むことなく、直視しなくてはならない現実には、私たち人間が地球のあり方を取り返しのつかないほど大きく変えてしまっているということだ。

人類の経済活動が地球に与えた影響があまりに大きいため、ノーベル化学賞受賞者のパウル・クルツェンは、地質学的に見て、地球は新たな年代に突入したと言い、それを「ひとしんせい人新世」(Anthropocene)と名付けた。人間たちの活動の痕跡が、地球の表面を覆いつくした年代という意味である。

実際、ビル、工場、道路、農地、ダムなどが地表を埋めつくし、海洋にはマイクロ・プラスチックが大量に浮遊している。人工物が地球を大きく変えているのだ。とりわけそのなかでも、人類の活動によって飛躍的に増大しているのが、大気中の二酸化炭素である。

ご存じのとおり、二酸化炭素は温室効果ガスのひとつだ。温室効果ガスが地表から放射された熱を吸収し、大気は暖まっていく。その温室効果のおかげで、地球は、人間が暮ら

「北」格差は地理的位置との関係が必然ではなくなりつつある。そのため、本書では、グロバル・サウスという言葉を使いたい。

ともかく、旧来の南北問題も含め、資本主義の歴史を振り返れば、先進国における豊かな生活の裏側では、さまざまな悲劇が繰り返されてきた。いわば、資本主義の矛盾がグローバル・サウスに凝縮されているのである。

近年の大きな事件に絞ってみても、イギリスのBP社が引き起こしたメキシコ湾原油流出事故、多国籍アグリビジネスが乱開発を進めるアマゾン熱帯雨林での火災、商船三井が運航する貨物船のモーリシャス沖重油流出事故など枚挙にいとまがない。

被害の規模も大きい。二〇一九年に起きたブラジル・ブルマジーニョ尾鉱ダムの決壊事故では二五〇人以上が死亡した。このダムは、資源三大メジャーのひとつであるヴァーレ社の所有で、鉄鉱石の尾鉱（選鉱の際に生じる水と鉱物の混ざったスライム状の廃棄物）を貯めておくダムであった。

ヴァーレ社は二〇一五年にも同様の事故を、別のダムで起こしていたが、今回もさまざまな管理によって決壊事故を引き起こし、数百万トンの泥流が近くの集落を一気に呑み込んだのだ。尾鉱があたり一面にぶちまけられることで、河川は汚染され、生態系も深刻なダ

メージを負った。

これらの事故は単なる「不運な」出来事なのだろうか。いや、そうではない。事故が起こる危険性は、専門家や労働者、住民たちによって繰り返し指摘されてきた。それにもかかわらず、国や企業はコストカットを優先して、有効な対策を取らず放置してきたのである。これらは、起こるべくして起きた「人災」なのだ。

そうはいっても、遠く離れたメキシコやブラジルで起きた事故など、日本人の関心は及ばないかもしれない。自分にはまったく関係ないと思う読者もいるだろう。だが、この「人災」に、私たち日本人も、間違いなく加担してきた。

自動車の鉄、ガソリン、洋服の綿花、牛丼の牛肉にしても、その「遠い」ところから日本に届く。グローバル・サウスからの労働力の搾取と自然資源の収奪なしに、私たちの豊かな生活は不可能だからである。

▼犠牲に基づく帝国的生活様式

ドイツの社会学者ウルリッヒ・ブラントとマルクス・ヴェイツセンは、グローバル・サウスからの資源やエネルギーの収奪に基づいた先進国のライフスタイルを「帝国的生活様式